

さよなら国立競技場



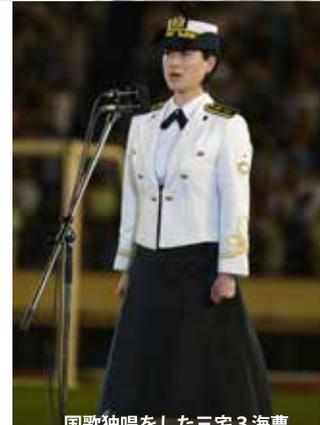
国立の空に舞ったブルーインパルス



聖火ランナーを務めた小原1尉



国立競技場最大のレジェンドは円谷選手が作った



国歌独唱をした三宅3海曹

さよなら国立競技場

2020年東京オリンピック・

パラリンピックに向けて全面改修に入る東京国立霞ヶ丘陸上競技場において、5月31日、通常の使用の最終日を記念するイベント『SAYONARA国立競技場FINAL FORT HE FUTURE』が開催され、防衛省から航空自衛隊のブルーインパルス、そして海上自衛隊東京音楽隊の三宅由佳莉3等海曹の国家独唱が行われるとともに、自衛隊体育学校からロンドンオリンピック金メダリストの小原日登美1等陸尉がレジェンドアスリートの1人として炬火リレー（1964年の東京オリンピック聖火リレーで使用したのと同じトーチを使用）を行い、国立競技場のトラック第4レーンを約100m、ゆっくりとラストランを行った。国立競技場は1958年のアジア大会、そして1964年の東京オリンピックから始まり、数々の名勝負、そしてスポーツの歴史を飾ったアスリートによる数々の伝説が生まれ、『スポーツの聖地』とも呼ばれている。だが、国立競技場は自衛隊体育学校にとっても聖地である。1964年の東京オリンピックにおいて国立競技場は開会式、閉会式以外に競技としては陸上競技と、サッカー、そして馬術が行われたが、この競技場における表彰式で、日本国旗（日の丸）を掲げることができたのは、マラソンで銅メダルを獲得した自衛隊体育学校所属の円谷幸吉選手ただ一人だった。ウエルトリフティングで金メダルを獲得した三宅義信選手とともに円谷選手の活躍が現在までも自衛隊体育学校を存続させてきたといっても過言ではない。その円谷選手が後ろを振り向くことなく必死に前に向かい続けゴールへ走り抜けたトラックを、その最後のランナーとして駆け抜けたのが小原日登美だったのだ。国立競技場は2020年の東京に向け新たなスタートを切ったが、自衛隊体育学校も新たな伝説をこの地で作るべく新たなスタートを切ったのだ。

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて全面改修に入る東京国立霞ヶ丘陸上競技場において、5月31日、通常の使用の最終日を記念するイベント『SAYONARA国立競技場FINAL FORT HE FUTURE』が開催され、防衛省から航空自衛隊のブルーインパルス、そして海上自衛隊東京音楽隊の三宅由佳莉3等海曹の国家独唱が行われるとともに、自衛隊体育学校からロンドンオリンピック金メダリストの小原日登美1等陸尉がレジェンドアスリートの1人として炬火リレー（1964年の東京オリンピック聖火リレーで使用したのと同じトーチを使用）を行い、国立競技場のトラック第4レーンを約100m、ゆっくりとラストランを行った。国立競技場は1958年のアジア大会、そして1964年の東京オリンピックから始まり、数々の名勝負、そしてスポーツの歴史を飾ったアスリートによる数々の伝説が生まれ、『スポーツの聖地』とも呼ばれている。だが、国立競技場は自衛隊体育学校にとっても聖地である。1964年の東京オリンピックにおいて国立競技場は開会式、閉会式以外に競技としては陸上競技と、サッカー、そして馬術が行われたが、この競技場における表彰式で、日本国旗（日の丸）を掲げることができたのは、マラソンで銅メダルを獲得した自衛隊体育学校所属の円谷幸吉選手ただ一人だった。ウエルトリフティングで金メダルを獲得した三宅義信選手とともに円谷選手の活躍が現在までも自衛隊体育学校を存続させてきたといっても過言ではない。その円谷選手が後ろを振り向くことなく必死に前に向かい続けゴールへ走り抜けたトラックを、その最後のランナーとして駆け抜けたのが小原日登美だったのだ。国立競技場は2020年の東京に向け新たなスタートを切ったが、自衛隊体育学校も新たな伝説をこの地で作るべく新たなスタートを切ったのだ。